

産業遺産紹介 IH-CSIH-076

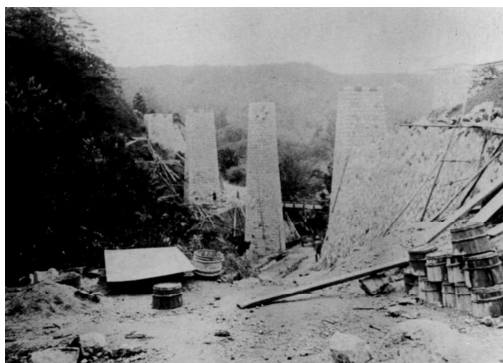
北恵那鉄道(株)上地橋梁

所在地：岐阜県中津川市瀬戸上地

北恵那鉄は1924(大正13)年8月から1978(昭和53)年9月まで運行していた。木曾川に大井ダムが建設されることで、付知川の御料林木材流送が不能となり、代替輸送機関として計画され沿線住民の要望を入れて貨客を扱う地方鉄道として発足した。会社設立は1922(大正11)年2月で、資本金200万円の半分を大同電力が出資し初代社長は福沢桃介であった。

北恵那鉄道は中央線現中津川駅の北に隣接する中津町を起点とし、旧付知町の下付知まで22.1kmを走った。軌道は単線、電車が貨車も牽引した。ゲージ1067mmで中央線との連絡路500mがあり貨物は積替え不要だった。敷設工事は設立同年の11月から始まり、殆どは人力で人工延30万人を要したという。

上地橋梁は橋長67.1m、4径間のプレートガーダー上路橋である。山之田川の流路に立つ中央の橋脚は断面が円形で、両岸の2つは矩形である。形状の違いは水流・土石流への配慮と考えられる。橋脚・橋台は全て地元産の花崗岩を利用した石積みで、100年を経てなお健在であり当時の技術の高さを示している。中央の一番高い橋脚は実測で約17.64mである。プレートガーダーは汽車製造(株)製で、側面に1923年の銘板がある。



【写真2】建設中の上地橋梁(1923年)

出典：『るさとの思い出 写真集 明治大正昭和 中津川』



【写真1】上地橋梁 (2025/03/25 筆者撮影)

上地橋梁は沿線で創業時のまま現存する橋梁の中で最大(木曾川橋梁は水害を避けるため4m嵩上げされた際に橋脚がコンクリートで巻立てられている。73.1mの付知川橋梁は廃線後崩落)で、周辺の軌道跡を含めて良く遺構が残っており貴重な産業遺産である。(文・写真：田口憲一)

中部産遺研会報 第99号 目次

1. 産業遺産紹介／田口憲一	1
2. 調査報告「新発見された各務原市鵜沼大安町の地下壕」／山田富久	2
3. 人造石の産業遺産を歩く(23)名古屋城の「たたき」遺産／天野武弘	10
4. 第33回総会、第188回定例研究会の概要／夏目勝之	17
5. 第189回定例研究会の案内／夏目勝之	19
6. 第190回定例研究会・見学会の案内／浅野伸一	19
7. 研究会費振込依頼、編集後記、原稿募集	19

調査報告

新発見された各務原市鵜沼大安寺町の地下壕

Newly discovered Bunker at Unumadaianji-cho, Kakamigahara City, Gifu Prefecture

山田富久／YAMADA, Tomihisa

キーワード：地下壕、各務原、大安寺、陸軍、飛行場、屯鶴峯

1. はじめに

従来、岐阜県各務原市鵜沼大安寺町2丁目にあるとして知られている地下壕（以下、東壕）から少し離れた西の場所で、新たな地下壕（以下、西壕）を発見した。西壕の総延長は約400mの大規模なものである。さらに西壕付近の谷の平坦地では、陸軍の遺物が見つかった。

東壕は、文書や地元の証言により1945年4～5月頃、陸軍が工事したと判明している。西壕は、近接する東壕と一体として同時期に陸軍が工事したと推定される。

ここでは、西壕の概略および発見の経緯を報告する。さらに陸軍の同一部隊が工事した屯鶴峯地下壕との比較をし、今後の展望について述べる。

2. 西壕の概略

まずは、呼称について整理しておく。大安寺地下壕とは、東壕、西壕およびその間にある谷の平坦地の遺物・遺構の総称である。個別には、P字壕、東壕、平坦地、西壕と呼ぶ（表1）。

(1) 西壕の位置（図1・図2）

西壕は、中山道の宿場、旧鵜沼宿の約1.1km北にある丘陵で見つかった。町名の由来である古刹の大安寺や明治時代初期に造られた新池（大安寺池）の東に位置する丘陵の中にある。

西壕は、その丘陵の西部（新池側）にあり、東壕は丘陵の東部（中口洞水路側）にある。

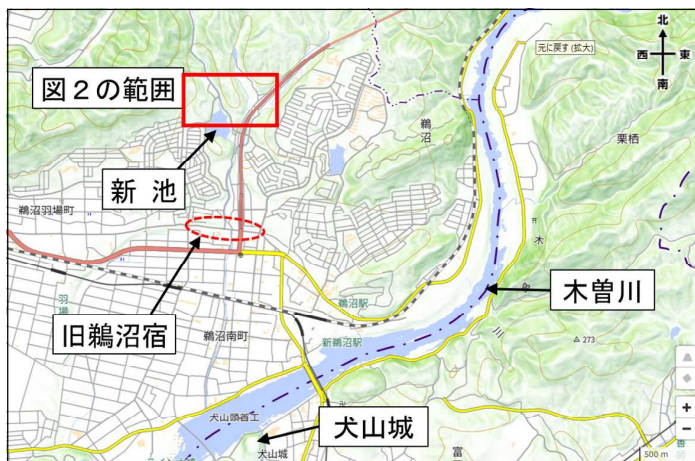
発見の経緯とも関連するため、東壕から話を始める。

・P字壕の西坑口（図2・図3）

Pの字型の地下壕は、丘陵東部の東斜面に開口部がある。坑道の平面形状が「P」の字であるので、ここでは「P字壕」と呼ぶ（表1）。この壕の最奥部の通路は行き止まりになっており、坑口であるかどうかは不明であった。第1回調査時、坂井莊二氏（以下、坂井氏）の案内により、最奥部通路は西坑口であり、現在は陥没状態であると分かった（写真1）。開口部からは、丘陵東部を超えた西側に位置する。

〔表1〕 大安寺地下壕の呼称

大安寺地下壕				
西壕 (新発見)	谷の平坦地 (遺物・遺構)	東壕 (既知)	N3	(陥没)
			N2	
			N1	
			P字壕	(陥没)
			S1	
			S2	



〔図1〕 大安寺地下壕の概略位置

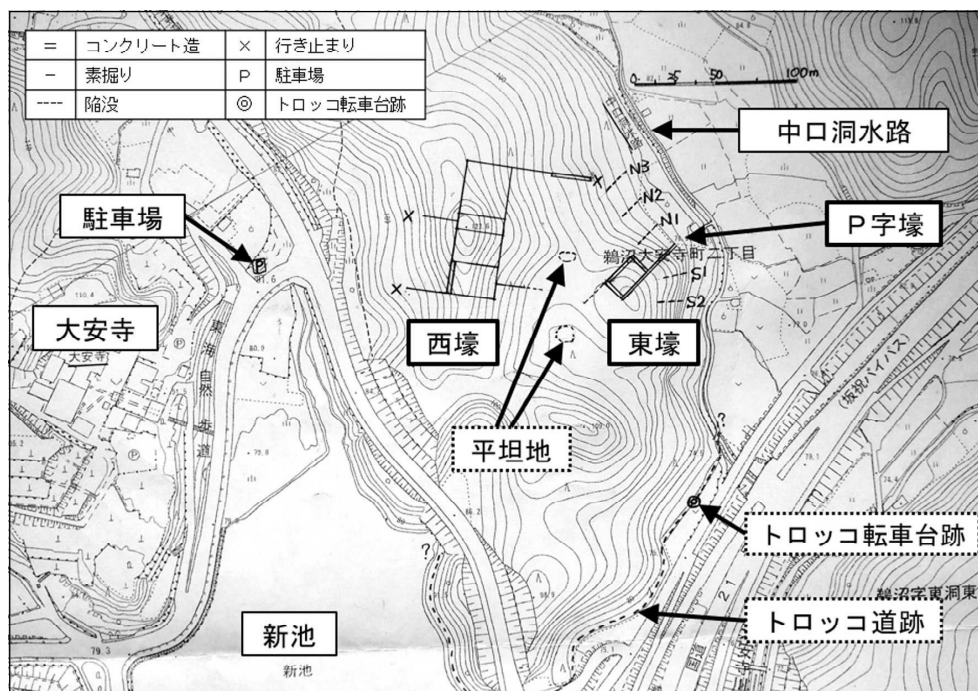
(国土地理院Vector(標準+陰影)に加筆)

第3回調査で、P字壕・開口部（以下、東坑口）から山越えするとこの陥没に至った。証言通りであった。

この陥没は、長さ18.0m、S42° W、幅約2～3m、深さ約1mである。陥没が、最奥部通路の全部に相当するか否かは不明なため、ここでは全部であると仮定する。P字壕・東坑口～西坑口までの距離は、計算上約66mとなる（図2・図3、伊藤厚史氏の計測値47.65m（23.65+24）¹⁾に18mを加算した）。

P字壕は入坑できないように閉鎖されている。地下壕の外から坑道の方角を推測しながら方位を測ると、S60° Wである。伊藤氏のS45° W¹⁾と、西坑口のS42° Wを勘案すると、S45° Wが妥当だと思われる。図2ではS45° Wとした。

・西壕の位置（図2）



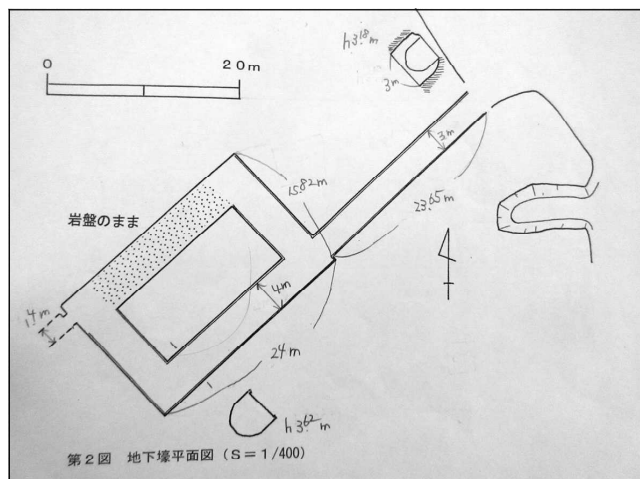
〔図2〕 大安寺地下壕の位置図
(各務原市都市計画図(2500分の1白地図)に加筆)

西壕・開口部(以下、東坑口)は、P字壕・西坑口から26.3m、西北西にある(写真2)。詳しい方位を未計測のため、図2では仮にN80°Wとした。

東壕と西壕は、同じ鵜沼大安寺町2丁目地内である。

(2) 西壕の大きさと方位(図4)

西壕の大きさは、初めて坑内に入った第1回目から気になっていたが、その時は30分程歩くのが精いっばいで、地下壕の全体像は分からなかった。第2回目に、猛者二人の協力を得て、地下壕を初めて一周した。それでも真っ暗なため、全周が100mを超えるかどうか



〔図3〕 P字壕(伊藤作成図¹⁾(部分)に、
伊藤の計測値を加筆)



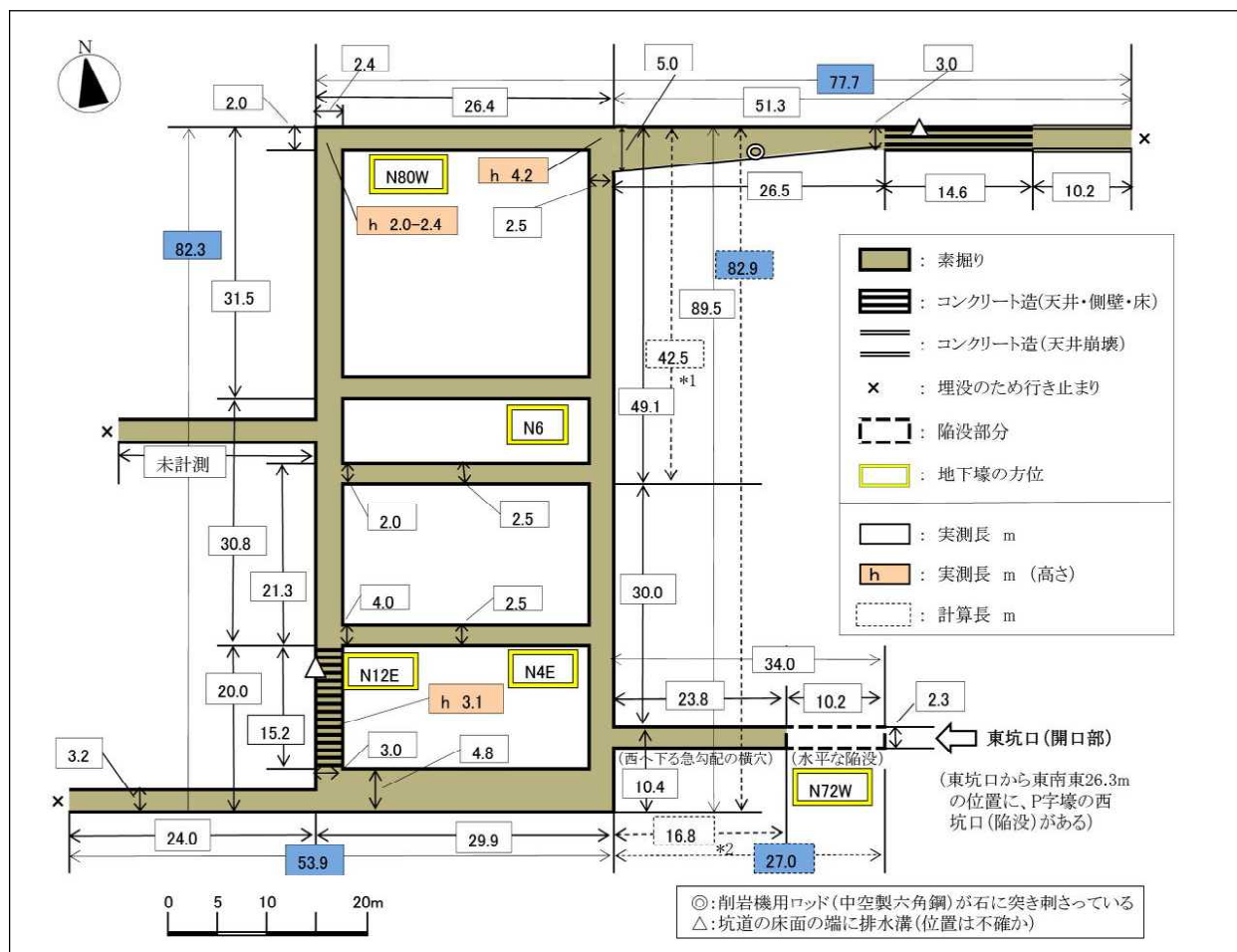
〔写真2〕 西壕・東坑口(開口部)



〔写真1〕 P字壕・西坑口(中央が陥没、南西から)



〔写真3〕 西壕内部(落石で埋め尽くされた床面)



〔図4〕西壕の概略平面図(計測者:寺脇・古橋・山田、作図:山田)

(注)・縮尺尺度約1/740の概略図である。図は、下記の*1と*2で補正した計算長で表した

・全周を計るにとどまる。未計測の坑道があり、幅や高さも一部しか測れていない

*1: 落石が堆積した床面の小山の傾斜を30°と想定し、計算長は42.5m(実測長49.1mとの差 △6.6m)

*2: 下り坂の傾斜を45°と想定し、計算長は16.8m(実測長23.8mとの差 △7.0m)。西壕の深さは約7mである

位の感じであった(写真3)。第4回目に、50mの間縄と5mのメジャーを使って距離を、レーザー距離計で高さを計測した。総延長は約400mであった。

この時、新たに西壕・南西角から西への坑道を見つけた。後日、図2の素案と図4を坂井氏に見てもらった。この西坑口は、図2の「P」(大安寺の北東にある現在は駐車場の)位置から、東南東方向の至近距離にある。かつて同じ方向の「丘陵の麓近くの低い位置に穴が開いていたので、それかもしれない」との証言を得た。西壕・南西角にある西坑口と戦後も開口していた穴とが同一か否か、位置や標高につき今後の検証を期したい。

丘陵西部の西(新池方向)への坑口は2ヶ所ある。もう一つの西への坑道は、時間切れで未計測である。未発見の坑道が、まだ他にあるかもしれない。

西壕・北東部の南北方向の坑道は、崩落が激しく、床面が小山のように盛りあがっているため、水平に計測することができなかった。三角形の斜面を計つ

たので、底辺(床面)の長さを計算し、図示した(図4の*1)。東坑口(開口部)の下り坂も、同様である(図4の*2)。

西壕の方位については、暗くて遠くが見通せない坑内で3回、東坑口の陥没で1回計測した。数値にばらつきがあるが、東西方向はおおよそN78°W~N86°Wであり、真西~西北西である。図2では稜線を考慮しN85°Wとした。東壕の東西方向は先述したようにS45°W、南西である。

東壕と西壕がある丘陵の稜線は二列あり、ほぼ南北方向であるが、平行ではない。谷間に入って観察すると「V」の字状に北へ開いている。この地形が、両地下壕の掘削方向を少し異なった方向にしていると思われる。

なお、全4回の調査の弱点としては緯度・経度を計れていない。近距離を計測する機器がないためである。

東壕・西坑口と西壕・東坑口は、浅い谷地形の中

で向き合った形である。東壕と西壕が接続せず、東壕から一旦出て、西壕に入るのは、地形上の制約による。

西壕・北東部にある東への坑道は行き止まりの状態(図4)であるが、図2を見ると東壕・N3(陥没)と近い位置にある。コンクリート造であることから坑口の可能性が高いので、N3と内部で接続しているとは思えないが、どういう関係なのか興味のある箇所である。

(3) 西壕の内部

西壕の大半は素掘りの状態であるが(写真4)、コンクリート造(天井・側壁・床面)が2ヶ所ある。先述した北東部にある東への坑道は坑口の可能性が高いが(写真5)、コンクリート造の近くで、削岩機用ロッドが岩に突き刺さった状態で見つかった。中空の六角形鋼で、胴幅が21cm、岩から出ている長さ²⁾が102cmである(写真6)。長野県の松代大本営象山地下壕で5本のロッド、東京都の浅川地下壕(中島飛行機武蔵野製作所のエンジン製造地下工場)で2本のロッドが見つかるが、全国的に見ても希少な遺物である^{2) 3)}。



[写真4] 西壕・北東部の素掘り(奥穴はコンクリート造)



[写真5] 西壕・北東部(コンクリート造)西から



[写真6] 西壕・北東部にある削岩機用ロッド



[写真7] 西壕・南西部(コンクリート造)東から

南西部にある南北方向の坑道は、南方向は尾根であり、西(新池側)への坑口でもない。地盤が軟弱であったため、コンクリートで補強したのであろうか(写真7)。

(4) 西壕・東坑口付近の平坦地と遺物

西壕・東坑口付近の南と北に、各1ヶ所平坦地がある。谷が狭く、東西の幅は歩測で約13mである。北の平坦地の南北は、歩測で約6mである。南にある平坦地の南北の長さは、起点・終点が曖昧であるが、歩測で約15m。

北の平坦地では、飯碗(見込みに陸軍の五芒星、高台裏には製造会社の刻印)と薬瓶(Wakamotoの陽刻)が見つかった(写真8・写真9)。

南の平坦地では、割れたビール瓶が見つかった(写真10)。瓶底には大日本麦酒のロゴである陽刻の星型マークがある(「17 星型マーク 13」、下段にY)。瓶の胴下部には陽刻の文字が読める「D (AI) NIPPON B (REWERY Co. LTD)」(筆者: 括弧内は欠損)。

1940年(昭和15)生まれで、地主の一人である坂井氏は「この谷で軍人が小屋掛けをしていた場所が2



[写真8] 五芒星の飯碗



[写真9] わかもとの薬瓶

ヶ所あった」と証言している。南・北の平坦地とその遺物は、証言と符合する。陸軍軍人がこの谷に常駐していたと判明した。



[写真10] 大日本麦酒のビール瓶(底)

3. 西壕発見の経緯

(1) P字壕からの始まり

鵜沼大安寺町の地下壕は、かつてP字壕以外に7～8基あったとされるが⁴⁾、現存するのはP字壕だけのようなのである。2025年2月に、初めて地下壕の現況確認に出かけた。

P字壕は丘陵東部の東斜面の麓に東坑口(開口部)がある。失われた他の地下壕の位置については正確な記録がないためハッキリしないが、P字壕近くと

推定される。

P字壕付近を探したが地下壕は見あたらない。しかしP字壕の北に3ヶ所、南に2ヶ所、約10数mの長い陥没が見られる。陥没が、地下壕跡か自然の谷地形かを見極めるのは難しい。陥没の幅が約3mと狭いこと、陥没の低い位置付近にズリが多数見られること、丘陵の麓にズリで造成された広めの平坦地があることから、地下壕跡であると推定した。丘陵東部の東斜面には、P字壕を含めて6基の地下壕が南北に並んでいたと推定できる。

北側の陥没を、P字壕を起点として順にN1・N2・N3と呼び、南側の陥没を同様にS1・S2と呼ぶ(図2)。陥没間の距離は、S2から北へ順に、19.2m、18.5m、17.0m、18.9m、20.0mである。計測誤差を考慮すると約19.0mの等間隔なのかもしれない。現地での地形観察と地形図から坑道の向きを推測すると、P字壕と北の3基(N1～N3)は南西方向で、南の2基(S1・S2)はほぼ西方向かと思われる。

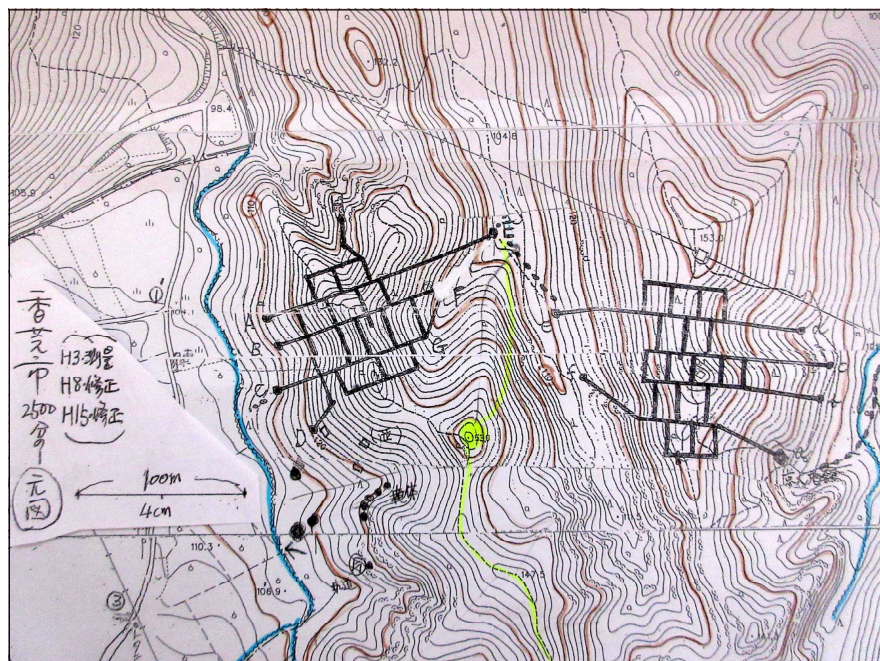
この6基ですべてだと思った。しかしP字壕の「最奥部の壁には幅約1.4mの出入口があり、通路があったようであるが、コンクリート造ではなく、土砂で埋まっている」との伊藤氏の指摘¹⁾が気にかかっていた。坂井氏の「向こうに穴があいているよ」との声に従い、一同は別場所に向かった。

(2) 西壕の発見

P字壕から離れて、浅く緩やかな谷を登ると、右手(丘陵東部の西斜面)に陥没がある。陥没は、丘陵東部の東斜面にあるP字壕・東坑口の最奥部のようなのである。坂井氏は、P字壕の西坑口があった場所だと断定した。そのあたりは平坦地近くでもある。(その後の計測で、陥没の長さは18.0mあり、山越えして位置確認したことは先述した。)

その陥没の西の向かい側、丘陵西部の東斜面のやや高い位置に、もう一つ陥没があった。(第4回調査で、長さ10.2m、幅2.3m、深さ約1m、方位はN72°W。)陥没の先には開口部が見える。ひとが一人通れそうな穴である。地下壕のようだが、怖がって誰も入りたがらず、筆者一人が入った。夕暮れが近づき、体力・気力が低下していた。約30分、40～50m程坑内を探索した。

開口部は土砂が入り込み、45度ほどの急な下り坂になっている。斜面は、土砂と崩落した岩石とで足場が悪い。なんとか下って行くと、その先はT字路だった。床は平坦のようだが、落石が山積みのため容易に進めない。石の角が尖っていたり直角だったりして危険である。左右それぞれ、約10m先まで歩



〔図5〕 屯鶴峯地下壕の位置図(右が東壕、左が西壕)⁵⁾

いても行き止まりにならない。坑道は先まで続いている。用意した照明では、直線の坑道がどこまで続くのか見通せない。一人では危険なので、再訪を期して開口部へ戻った。「大きな地下壕で、先が見えない程だった」と報告したが、残りの五人は待ちくたびていた。

以下、第2回目以降の概略を表2に記す。

〔表2〕 調査ステップ (概要)

	日時	時間	やったこと	備考
第1回	2月27日	3時間	・P字壕・西坑口(陥没)発見 ・西壕・東坑口(開口部)発見	谷の南平坦地でビール瓶を拾う
第2回	5月5日	6時間	・西壕内の探索により平面形状を把握	—
第3回	5月21日	2時間	・東壕間の距離を計測 ・P字壕・西坑口の位置検証	谷の北平坦地で茶碗・薬瓶を拾う
第4回	6月4日	3時間	・西壕内部の計測 ・西壕と東壕の距離計測	—

4. 屯鶴峯地下壕との比較

(1) 屯鶴峯の地下壕とは

屯鶴峯は、奈良県香芝市に南北の稜線を有する山で、地下壕はほぼ東西方向に掘られている(図5⁵⁾・写真11)。東と西にある地下壕の総延長は各約1kmである。

文書や現地の証言によれば、東壕は、1945年6月以降に陸軍(航空総軍第19地下施設隊(帥19502部隊))^{6) 7)}によって掘られた。西壕は別の部隊の可能性が高いが、部隊名は判明していない。

本土決戦の一環として、航空総軍司令部が予定された陸軍大正飛行場(現在の八尾空港)との関連で

造られた地下壕である。東壕は司令部との通信施設である。西壕については、通説では「戦闘指令所」と解釈してきた。陸軍の文書にある「航空総軍戦闘指令所牡丹洞」と屯鶴峯とは同一であると解釈する⁸⁾。その正否は議論が始まったばかりで、用途についてまだ解明の途上である。

NP0法人平和のための香芝戦争展(以下、NP0)が地下壕の実態解明だけでなく、戦争遺跡として、地元での広報・普及活動や将来に向けた保存・活用の提案など、精力的な活動を行っている。

(2) 見学のきっかけ

戦争遺跡を調査する三人の仲間が、次々と屯鶴峯を訪問し実態解明に関わっていることを偶然知り、筆者も興味を持った。NP0のホームページを見ると、地下壕を掘った部隊は、屯鶴峯の前に大安寺で地下壕工事をしていたとある。各務原市の歴史に興味を持っていたが、両地下壕のつながりについてはこの時初めて知った。

さっそく、NP0の西嶋拓郎氏と森みさお氏に案内して頂いた。当初は、大安寺地下壕探索前の2月初旬の予定であったが、大寒波のため日程を延期し、初訪問は4月21日となった。5月15日に再訪した。なお東壕は、戦後、京都大学屯鶴峯地殻変動観測所がその南部に観測機器を設置し、坑道の一部を改変している。現在、東壕に一般人が立ち入ることはできない。西壕のみ見学が可能である。



〔写真11〕 屯鶴峯西壕・東坑口・FとG

(例外的に二つの坑口が近接する。右穴のFは、一直線のため約100m先の西の坑口Bまで見通せる)

(3) 屯鶴峯地下壕との比較

先にかいたが、各務原市と香芝市という離れた場所にある二つの地下壕は、陸軍の同一部隊が掘ったとのつながりがある。大安寺の規模の大きさを見ると、屯鶴峯工事の前に、訓練で掘った地下壕とは考えにくい。本来の使用目的が何であったかの解明は、今後の課題である。

両地下壕は、陸軍飛行場と近い距離にある。屯鶴峯地下壕は大正飛行場との直接的な関連で掘られた。大安寺地下壕は、今はまだ各務ヶ原飛行場との関連が見つからない。

二つの地下壕は、地形上の共通点を持つ。二列の低山の稜線はほぼ南北方向に並び、その間に浅い谷がある。このため両者共に東と西に地下壕があり、坑道は東西両方向から掘られている。総延長では屯鶴峯の方がかなり大きい。坑道の断面の大きさは似ている。大安寺・西壕も屯鶴峯・西壕も、坑道の幅・高さのばらつきが大きい。大安寺・西壕は、幅が2.0～5.0m、高さが2.0～4.0mで、屯鶴峯・西壕（の最頻値）の幅は3.3～3.6m、高さが2.3～2.8mである。体感では大安寺の方がやや大きく感じられるが、暗さから来る恐怖のせいかもしれない。大安寺の第4回調査の二人は屯鶴峯を見学している。両壕は、周囲の地形や坑道の大きさ・感じが似ていると、共通の印象を持った。

相違点では、大安寺・西壕は素掘りが基本であり、坑道の一部がコンクリート造である。コンクリート造の床には排水用の溝が見られる（写真12）が、両端にあるかどうかは落石が邪魔して確認できない。



〔写真12〕大安寺西壕・北東部（コンクリート造の排水溝）

P字壕は、コンクリート造である。排水溝が床の両端に見られる。他方の屯鶴峯（西壕・東壕）は、すべて素掘りである。屯鶴峯・西壕にコンクリート造がないのは、工事完了前に終戦となったと推定できる。西嶋氏から、排水溝が埋もれているかもしれない

いので探している、と聞いた。

また地下壕の平面形状は、東西方向に坑口がある点が両壕に共通している。大安寺・西壕は、「目の字」型の変形でシンプルである。屯鶴峯（西壕・東壕）の平面形状は、南北は連絡壕であり、基本貫通しない「網の目状」に掘られている。

屯鶴峯・西壕は、地表部に多数の遺物・遺構が見つまっていること、地表部の遺構へつながる南・北各方向の坑口（D・H）があること、坑内での部屋取りを意図したと思われること、などの特徴がある。

大安寺では、丘陵西部の西斜面と丘陵東部の東斜面に、丘陵を挟む形で「Y」の字状にトロッコ道があった、との坂井証言がある。丘陵西部・西斜面の新池沿い～丘陵南部の麓には、幅が1m未満のトロッコ道跡が確認できる（図2）。坂井氏は、丘陵の東西からの合流部、すなわち「Y」の交点の場所（丘陵南部の東）に、トロッコの転車台（回転台）があったと言う（図2の◎・写真13）。現地に立つと、平ら



〔写真13〕トロッコ転車台跡地を北東方向から
（中央右の枯れ木辺り）

な場所が北東～南西方向に広がり、畑となっている。転車台の適地と感じられる。転車台から先は、南方向に橋本薬局（鶴沼東町1丁目の旧中山道沿い）まで下りのトロッコ道が通じていたようである。トロッコの運搬物が何であったか、地下壕の用途との関連で知りたいところであるが、不明である。屯鶴峯では地表部にトロッコ道の跡は見つからないが、構内にズリ運搬用のトロッコの枕木跡が残る。

今後、大安寺地下壕を詳しく調査すれば、屯鶴峯地下壕との共通点や相違点が明確になり、両壕の使用目的解明につながるのではないかと期待する。

5. 今後に向けて

今回の報告は、これまで知られていなかった大安寺地下壕（西壕）の発見にとどまる。地下壕内部の

観察は、まだこれからである。谷の平坦地を探せば遺物が見つかり、また遺稿が残っている可能性もある。

以下、今後の課題について簡単に述べる。貴重な戦争遺跡として、まずは記録を残すために、特に①・②については、各務原市文化財課の協力を得てできるだけ早い時期に実施したいと期待する。

①西壕・東壕の内部の計測、さらに両壕の東西両側の坑口付近の計測。（それにより、西壕と東壕とのつながりの有無、関連や位置関係を解明する。）

そして大安寺地下壕のある丘陵の遺物・遺跡の詳細調査。特に丘陵東部の東斜面（P字壕・東坑口）付近、まだ何も見つかっていない丘陵西部の西斜面、その間にある谷の平坦地での調査。

②文書の探索や聞き取りの徹底により、大安寺地下壕の掘削の経緯を明らかにし、その使用目的・用途を解明する。（例えば、各務ヶ原飛行場にいた陸軍航空廠などの陸軍の部隊用なのか、川崎航空機工業（以下、同社）などの疎開工場の予定だったのか。）

③全国に残る地下壕との比較により、大安寺地下壕の特徴を明らかにする。

④地域住民、地主、戦争遺跡研究者および各務原市の四者による、地下壕の記録、保存および活用についての話し合いの開始。

疎開工場に関連して、忘れられがちな事実である定盤^{じようばん}について記す。同社の養成工修練道場跡（各務原市各務山^{かかみ}の前町）には、戦後、未使用で残された定盤があった⁹⁾。定盤の大きさは、縦100cm、横100cm、厚さ16-17cmの花崗岩製である。現在、4つの社寺と複数の個人宅で、主に参道の敷石などに再利用されている。6月現在で176枚を確認した。

「定盤は、学校工場・林間工場・地下工場で使用するために集められていたものと思わ⁹⁾れるが、相当な枚数である。1945年春は、同社が近郊へ工場疎開する只中である。大安寺地下壕は疎開工場に使われる予定だったのでないか、との仮説を裏づける材料なのかもしれない。なお、定盤の存在については、岐阜県関市在住の西村勝広氏のご教示による。

なお写真はすべて筆者の撮影。撮影時期は、写真1・10が2025年2月で、それ以外はすべて5月である。

付言

大安寺地下壕は私有地内にあるため、許可なく立ち入ることはできない。また地下壕内は崩落の危険性が高く、また角張った落石が床に山積みのため二足歩行が困難であり、坑内の湿気で石が滑りやすい

など、極めて危険な状態である。携帯は通じない。許可を得ても、十分な装備が必要であり、決して一人で入ってはならない。

謝辞

現地案内や証言、計測など、地元の方々をはじめ、戦争遺跡研究者、先輩や仲間に変にお世話になった。諸氏のご協力がなければ、大安寺地下壕（西壕）の発見には至らなかった。ここに記し感謝の意を表する。（敬称略）

調査

【第1回調査】（各務原市在住）坂井莊二・坂井久夫、（濃尾・各務原地名文化研究会）可児幸彦・富沢実・鈴木利明、山田

【第2回調査】（三重県歴史教育者協議会）岩脇彰、（愛知県江南市在住）西田敦、山田

【第3回調査】（各務原市在住）坂井莊二・安田新作、山田

【第4回調査】（瀬戸地下軍需工場跡を保存する会）寺脇正治、（濃尾平野を歩く会）古橋和佳、山田

参考文献

- 1) 伊藤厚史「大安寺地下壕」『戦史考古学研究』No2、私家版、2004年、pp. 60-63
- 2) 松代大本営の保存をすすめる会『ガイドブック 松代大本営』、新日本出版社、1995年、pp. 29-32
- 3) 浅川地下壕の保存をすすめる会『フィールドワーク 浅川地下壕』、平和文化、2005年、pp. 18-2
- 4) 各務原市戦時記録編集員会編『各務原市民の戦時記録』、各務原市教育委員会、1999年、pp. 196-197、p. 273
- 5) 西嶋拓郎作成「屯鶴峯地下壕地図」（香芝市 2500分の1地図に西嶋が加筆、著者が着色）
- 6) NPO法人 平和のための香芝戦争展『屯鶴峯地下壕関連資料』、2024年、pp. 4-5、pp. 22-25
- 7) 「軍令陸甲第68号 陸機密第135号 地下施設隊 臨時編成要領、同細則 昭和20年4月17日」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C14010704600（防衛省防衛研究所）
- 8) 河内の戦争遺跡を語る会 大西進「八尾大正飛行場から見たどんづる峯地下壕」『第16回平和のための香芝戦争資料』、2017年
- 9) 各務原市歴史民俗資料館編『各務原市の戦前・戦中・戦後史』、各務原市教育委員会、2016年、pp. 39-42

人造石の産業遺産を歩く(23)：服部長七の人造石工法(長七たたき) ー全国に点在する人造石遺産ー 名古屋城の「たたき」遺産

Artificial Stones by Hattori Choshichi and Method of Construction:

(23) Artificial Stone Structures as Industrial Heritage, “Tataki” Heritage in Nagoya Castle

天野武弘／AMANO, Takehiro

Key Words ; Artificial Stones, Choshichi-Tataki, Hattori Choshichi, Industrial Heritage、Nagoya Castle

1. はじめに

名古屋城内に「たたき」の構造物があることは、しばらく前から知ってはいた。それは南蛮練堀鉄砲狭間(敵を撃退する銃眼を持つ壁面)と呼ばれる堀で、二之丸庭園北端の水堀に面した石垣の上部の縁に細長く造られている。ただし、服部長七の考案した人造石工法のように割石が使っているわけではなく、在来のたたき工法による一つの事例と考え、それ以上には目が行き届いてなかった。

ところが最近になって、名古屋城調査研究センター(以下、研究センターと略)から、名古屋城西側で堀川脇にある旧「辰之口水道大樋」の遺構から発掘されたたたきの鑑定を依頼された。その際、城内から数多くのたたき遺構が発掘されたことも聞き及んだ。中でも二之丸庭園に集中していることを教えられ、その現状も拝見することができた。

以後数回にわたって現地に訪れることができたので、今回は研究センターの協力を得て、城内のたたき施工の実状や現状について概要を紹介する。

なお、たたきとは、消石灰と真砂土などの土に少量の苦汁を加え、水で練り合わせたもので、小粒の砂利を加える場合もある。このたたきを応用した服部長七の人造石工法も基本的には同じ材料を用いているが、苦汁や小砂利を入れることは少なく、消石灰の配合割合を減じた練土をつくり、表層に割石面を出す形に造り上げることを特徴としている。ここが在来のたたきと違うところである。

たたきについては、材料の配合面の違いから「三和土」とか「二和土」とも書かれ、「叩き」、「敲き」、「タタキ」と書かれる場合もあるが、本稿では「たたき」として述べる。

2. 発掘された辰之口の「たたき」遺産

(1) 辰之口水道大樋とは

辰之口水道大樋(以下、水道と略)の設置は寛文3(1663)年といわれる。目的は、水堀の水の排水



図1 名古屋城内のたたき遺産(辰之口水道大樋、二之丸庭園北池、南蛮練堀)所在地(国土地理院地図空撮に加筆)

用であった。名古屋城の水堀は、慶長15(1610)年に名古屋城の建設が始まった時に開削され、水は雨水と熱田台地からの湧水で賄っていたとされる。しかし次第に水量不足となり、庄内川を水源とする御用水が開削された。水は満たされたが、大雨時には水堀に流れ込む水量が増大し、その排水対策から辰之口に水道が設置されている。

水道からの排水先は、名古屋城建設の際に開削された堀川である。当時の堀川は、水道のすぐ下流の朝日橋辺りが川の終点となる堀留であった。そのため排水用の水道は、いったん水堀から西に向かい、50mほど直進したところでほぼ直角に南に折れて堀留となる堀川に放流する形となっていた。流路が変更となったのは、設置から100年以上経った天明5(1785)年といわれる。理由は、これも洪水対策であるが、名古屋城の北東側に流れていた大幸川を堀川に付け替える工事であった。これによって上流側が開削され、辰之口の水道が大幸



図2 開削初期(大幸川を堀川に付け替える前)の辰之口水道大樋(水色の破線)の流れ(国土地理院地図に加筆)

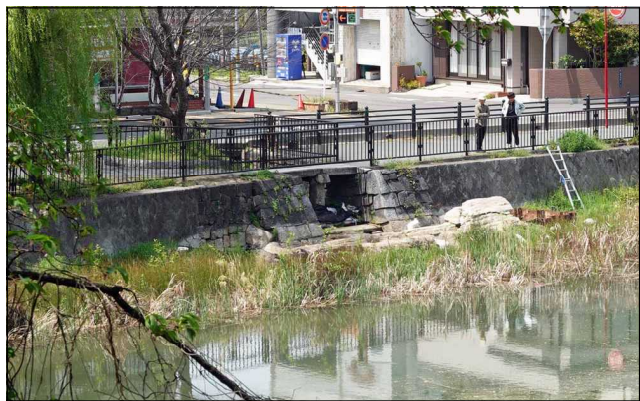


写真1 辰之口水道大樋の遠景、水道大樋の入口から約50m先の堀川まで通じていた、現在は閉鎖(2025.4.19筆者撮影)

川(現堀川)と一直線に結ばれることとなった。その様子が江戸時代後期の資料『金城温古録』に簡単な記述と絵図で描かれている。

なお、大幸川が堀川に流れ込む部分は高低差ができて滝となったことから、ここに架けられた朝日橋(天明5年・1785年架橋)は、ザーザー橋とかドンドン橋とも呼ばれ、親しまれていた。

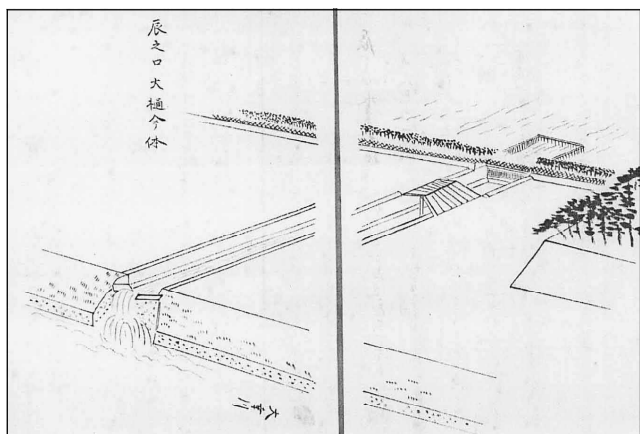


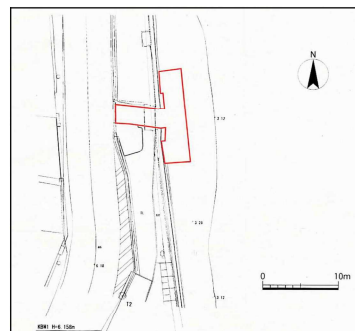
図3 辰之口水道大樋の絵図、奥の水堀から手前の大幸川(現堀川)に排水される様子が描かれる(出典:『金城温古録』(五十三「御深井御庭編之四 御深井御堀部」))

(2) 辰之口水道大樋の発見

辰之口の水道発見の経緯は、名古屋城の歴史的価値をわかりやすく伝える計画の一つとして、水堀を活用した船による周遊船運行の船着き場とされたことによる。その調査の際に埋立地部分から石の出っ張りが見つかり、石の専門家に鑑定を依頼したところ自然石ではないことがわかった。この水道については『金城温古録』に、「樋の両側 石組 底共に南蛮たつき」との記述があり、また名古屋城内ではここ以外にも各所からたたきが発掘されていることから(後述)、これに類似するものと判断して、研究センターによる発掘が進められた。

水道の位置は図2及び図4に示すように、水堀と堀川を結ぶ位置にある。水堀側は写真1に見るよう

に護岸は石組となり、水道入口付近に護岸に沿って南北約12m、東西約3mの埋立地がある。ちょうどここが船着き場の予定地となることから発掘調査された。



その発掘調査の過程で、依頼があつて現場観察したところ、外観的には紛れもないたたきであることを確認した。今後予定される採取試料の科学分析によって確実な結果が得られると思われるが、ここでは現場観察から気付いたことを述べる。なお、発掘現場の実測値(一部図より計測を含む)及び図版、オルソ画像については、研究センターより提供を受けた。

(3) 辰之口水道大樋「たたき」発掘現場実見から

辰之口水道大樋の歴史事情は、江戸後期における名古屋城の諸施設や城内の事柄を詳しく記述した『金城温古録』に記される。先の南蛮たたきで造られたとの記述に続いて、「巾九尺 総長三十間五尺 東の口立切有り(中略)西の端に切石の銚子口有り」とある。これによると水道部の大きさは、幅約2.7m、長さは55.1m(現存する水道の幅は南北約2.4m、長さは東西約5.7m)となる。また西の端に銚子口とあるように、この段階では図3に見られるように水道は一直線となって大幸川に流れ込んでいるので、天明5(1785)年以降の状況を記していることがわかる。また銚子口とあるように、出口部分を何らかの方法で絞っていたことが図3に見られるが、現在、西端の現堀川側の排水口は完全に閉鎖されており、その様子は窺い知ることができない。

一方、立切が記される水道の東口すなわち水堀側は、立切施設は取り払われているが、その痕跡は残している。立切とは、水を堰き止めて流れる水量を調整する施設であり、水堀の排水量をここで調整していた

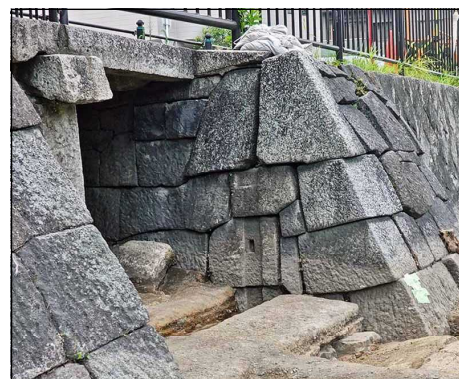


写真2 辰之口水道大樋の東口、石垣下部に立切の溝が残る、石垣は積み直されている(2024.7.24筆者撮影)



図5 辰之口水道大樋のたたき出土平面図とオルソ画像(「名古屋城調査研究センター」提供)

これらから後に積み直したと考えられる。ただし、『金城温古録』の水道の図には門扉は1カ所しか描かれていないので、2カ所目は後に設置された可能性がある。

樋の底の方は、ほぼ全面にたたきの施工が見られ、南蛮たたきと書かれる記述と合致する。その施工の様子は、研究センターの断ち割り調査から新たな事実がわかりつつあるが、ここでは概要に留める。

まず断ち割り調査などから、発掘されたたたきの質や施工状況から、水道東口前の埋立地部分(後述)を含め、4つに

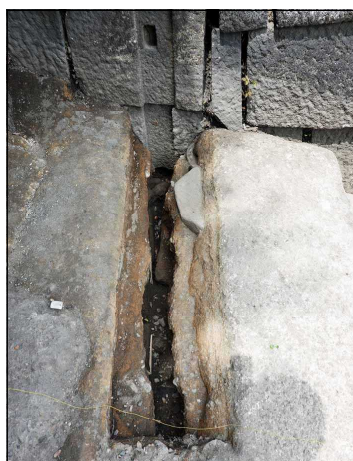


写真3 東口立切の門扉の溝は下部まで通じている、水道の底はたたきで施工(2024.7.24筆者撮影)

ことがわかる。

この立切があつたと思われる水道入口部の石積みに、自然のものではない縦方向の溝が残っているのが確認できる。門扉を入れた溝と思われる。これがさらに地下まで続いているのが断ち割り調査によって確認されている。この門扉跡は東

口の入口部分と石橋を挟んだ2mほど離れた2カ所に確認される。

『金城温古録』にある「樋の両側 石組 底共に南蛮たたき」との記述について、樋の両側とは水道の両側壁面の石組を指していると思われるが、現状は目地を含めたたたきの様子は見られない。また当初の幅九尺(約2.7m)とあるが、現状は約2.4mであり、



写真4 東口より見る水道内の全景、底は全面たたきで施工されていたことが判明(2024.7.24筆者撮影)

大別されている。水道内では最も下部に位置するたたきの層、その上に施工されたたたきの層(ここは形状等からさらに3つに細分)、そして石積面と接する部分に丸みを付ける形に施工されるたたき部分の3種類である(もう1種は埋立部分、後述)。それらの厚さはおよそ10~30cmである。それぞれの時代考証は今後に待つが、何度かの改築なり修理を経ていることがわかる。

また水道の深さについては、これも発掘により最下段の石組の下端面が確認され、江戸期の

設置当初は現底面より約1m低い位置とわかったが、南蛮たたきの存在までは確認できなかったとされる。また60cmほどの深さの所から30cm前後のかなり厚いたたきの層が確認されている。

これらの調査結果から、近代になって(出土品から明治20年代の可能性も)水道の底上げが行われ、水堀の水の流入を防ぐ、あるいは水堀水位を



写真5 石積面と接する部分に丸みを付けて施工されるたたき(2024.7.24筆者撮影)



写真6 石垣下部まで厚みのあるたたきで施工が確認(2024.7.24筆者撮影)

高く保つための施工があったと考えられている。

こうした目的と合致する可能性があるとしているのが、水道東口前の埋立地のたたき構造物である。ここは 1998 年に実施された水堀の護岸工事の際に設置された長さ 4m の鋼矢板で囲われた埋立地で、先に述べた自然石ではない石が発見されて発掘に至ったところである。

写真 7、8 に見られるように、水道東口前の護岸に沿う形で、水道側の護岸と護岸根固めと思われる部分を含め長さ 11m ほどのたたき構造物が、現状何か所かに割れを生じながら現存している。幅は護岸の中央部付近で約 1.2m、根固め部の方は約 40cm である。高さ方向は、護岸の方は水道部のたたき面とほぼ同じであるが、根固め部は 15 ～ 20cm ほど低くなっている。



写真7 水道前の埋立地のたたき構造物(2024.7.24筆者撮影)

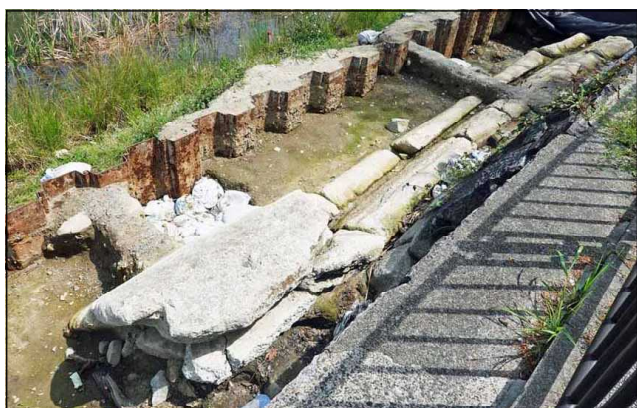


写真8 全体を俯瞰したたたき構造物(2025.4.19筆者撮影)

また北端にのみこのたたき構造物の上に乗っかる形で長さ約 2m、幅約 1m のたたき構造物がある(写真 8、9)。おそらく何らかの理由でここだけ残ったと見た方が自然であるが、当初は水道前のたたき護岸の上全体に施工されていたと考えられる。

これらのたたき構造物がいつ、何を目的にしたか詳細は不明であるが、たたき構造物の北端に鉄製のボルト付きの木枠と思われる板の出土もあることから、明治以降段階的に追加施工された可能性が考

えられる。水道前のたたき護岸自体の目的は、1873(明治 6)年に名古屋城に名古屋鎮台置かれ、水堀を水上訓練に利用する際に、水位を上げる水止め用の護岸の可能性が有力視されている。また水害などの際に堀川からの逆流や、海水の遡上を押さえる目的もあったと考えられる。

施工者はわかっていないが、1980 年



写真9 埋立地北側のたたき構造物と鉄製ボルト付きの木枠と思われる板が残る(2025.4.19筆者撮影)

代以降の工事であったとすれば、人造石工法を発明、施工した服部長七が何らか関わっていた可能性も否定はできない。服部長七の施工では割石を使うのを基本としているが、たたきだけで構造物を造ることも多々行っているからである(内国勸業博覧会会場土間、上野公園の土間や塀、広島監獄の塀など)。施工者についても興味津々である。

以上のように、水道部底面及び水道東口前を含め、ほぼ全てがたたきで施工されていたこと、しかも近代になってからの施工が考えられることなど、ここは名古屋城における新たなかつ重要なたたき遺構であることが明らかにされたといえる。埋め戻される予定とはいえ、新たな活用が期待される所でもある。

3. 二之丸庭園北池の「たたき」遺産

(1) 二之丸庭園とは

名古屋城の二之丸庭園は、寛永年間(1624～45)のはじめに二之丸御殿が完成した際に、築造が開始された。その後文政年間(1818～1831)に大きく改庭され、多くの築山を有する回遊式の和風庭園に姿を変えたとされる。しかし、明治になり、名古屋城域内に軍隊が駐留以後、兵舎などの造営が始まり、庭園も様相が大きく変貌することになる。ただし、二之丸庭園の北東に位置する北園池など一部に手の加わったところもあるものの、多くは江戸時代の姿を留めているといわれる。そして、終戦後は軍の施設や、入居していた大学の校舎なども撤去され、戦後の庭園整備を経て今日に至っている。1953(昭和 28)年に名古屋城二之丸庭園が国名勝に指定され、2018(平成 30)年には二之丸庭園全体が国名勝に追加指定されている。

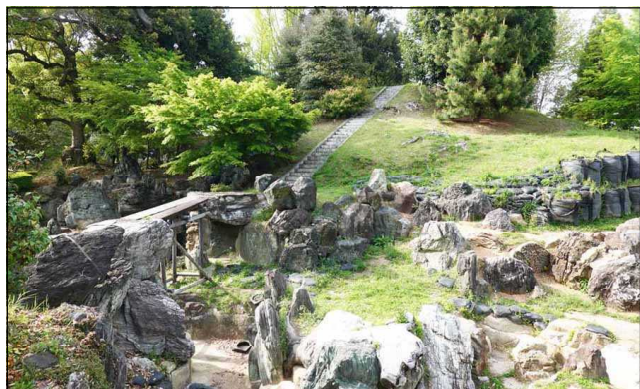


写真10 二之丸庭園の北池東側の一部(2025.4.19筆者撮影)

なお、この二之丸庭園も多くたたき遺産のあることが知られている(図6)。すでに研究センターでは二之丸庭園たたきの調査は進められ、たたきの擬岩や擬石に関する発表(文献(3))もされているので、それを参考にしつつ、筆者が実見できた範囲でこれらたたき遺産の概要を紹介することとする。

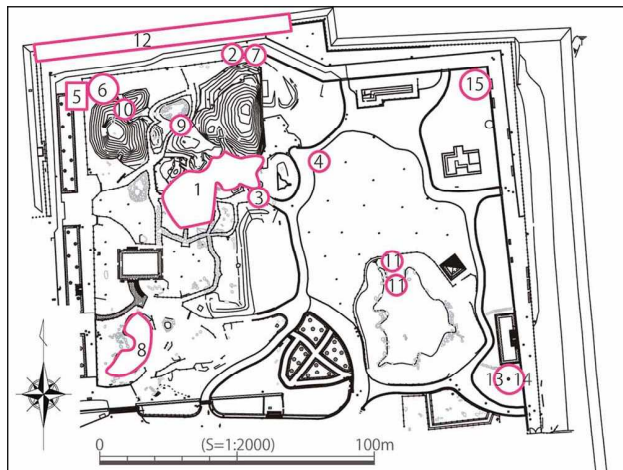


図6 二之丸庭園 出土たたき位置図(1が北池、計15カ所)
(出典:高橋圭也、「名勝名古屋城二之丸庭園における擬岩・擬石の年代・分類・構造の整理」)

(2) 二之丸庭園北池の「たたき」の護岸、池底、擬岩、擬石、擬木について

二之丸庭園の北池では現在、東側の発掘調査が行われ、古い年代のものと思われるたたきの護岸や、新たな池底と思われる部分の出土がされ始めている。また北池西側を含めた擬岩、擬石の調査も進められ、北池の全体像が明らかにされようとしている。

このうち、護岸や池底については、ほぼ全てのところでたたきの施工が確認されている(現状一部土の見えているところもあるが)。現在北池に水は溜められていないが、たたきは池底や築山に水が浸み込まないようにするための施工であった可能性が考えられる。北池の各所に造られる小さな水槽も護岸を兼ねる形にすべてたたきで施工されている。これらは北池を特徴付ける重要な要素の一つとなっている。

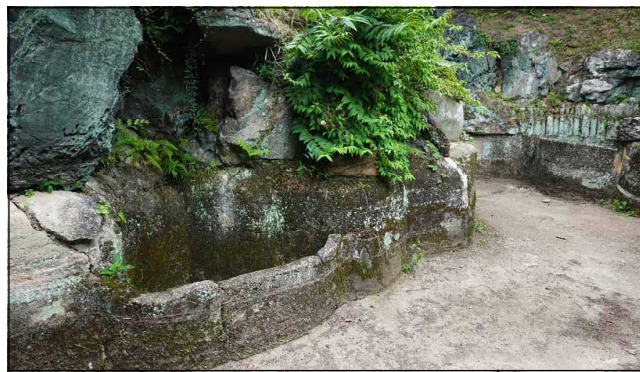


写真11 北池西側のたたき製の護岸、池底、水槽、擬岩、擬石、擬木(2024.7.24筆者撮影)

この護岸や池底の施工年代については、解明途上であるが、近代と考えられる所や最近の補修箇所もあるが、多くは近世の施工と考えられている。

また北池には、たたき製の擬岩、擬石、擬木も数多く存在している。これらは数え方によって異なろうが、ざっと見た範囲でも数十カ所に上る。これも北池を特徴付ける大きな要素となっている。

擬岩、擬石、擬木とは、天然石のように仕上げた人工の岩や石、自然の樹木のように仕上げた木のことである。北池の擬岩、擬石の製作年代については、ここを調査した研究センター学芸員の高橋圭也によれば、北池の西側と東側で異なるという。北池東側は1882(明治15)年に陸軍の兵舎建設に伴って池が埋設された可能性がありそれ以前の製作、また北池西側は常に地表に露出し続けていたため1882年以後に製作されたものが混在する、としている。



写真12 北池東側のたたき製の護岸、たたき製の擬石(2024.7.24筆者撮影)

擬岩、擬石の製作時期を推定出来る記録として高橋は、1879(明治12)年に吉田紹和と庭師の大島嘉吉による修理があるという。このとき池底の修理も行ったとされ、池底のたたきと同じ材料を使って擬岩、擬石を製作した可能性があるとする。しかしこの時点では北池東側の廃絶が決定されていたため、修理に及んでいない可能性が高いとしている。こうした点から北池の東側と西側の擬岩、擬石では、製作年代での相違が見られると結論づけている(擬岩



写真13 北池西側のたたき製の護岸の上に施工されるたたき製の擬石、擬木(2025.1.31筆者撮影)

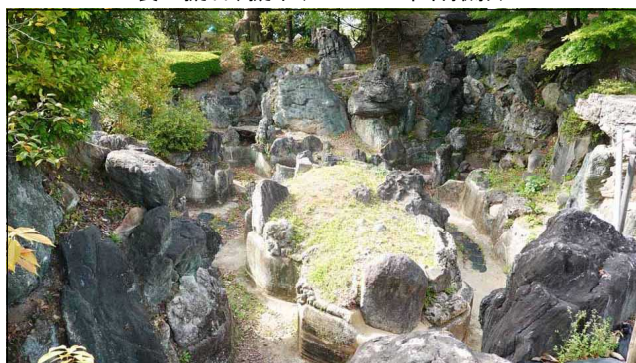


写真14 北池西側の一部俯瞰、いずれもたたき製の護岸、池底、擬岩、擬石、擬木が多数存在(2025.4.19筆者撮影)

と擬石の分類もしているがここでは割愛)。

なお、擬岩、擬石が庭園に用いられた記録上の最初は、奇しくも 1896 (明治 29) 年の服部長七の屋上庭園とされ、灯籠、手水鉢、飛石などを人造石で造ったとされる。これが東京、関西で流行するのが大正年間とされるので、北池の擬岩、擬石はこれに先立つ最初のものだったかもしれない。

また、北池では池底だけでなく土留めや護岸などもたたき (もしくは漆喰、1882 年以前が多い) で施工された所が多く、擬岩、擬石を含めたたたきの宝庫ともいえる状況が見られる。

4. 南蛮練塀鉄砲狭間の「たたき」遺産

南蛮練塀鉄砲狭間 (以下、練塀と略) は、二之丸庭園の北端に位置する (図 6 の No.12 の所)。建造年は、少なくとも文政期以前 (1818 年以前) といわれている。

練塀は、水堀から見ると石垣の上部に、東西に長く伸びた形で造られており、その様子は『金城温古録』(四十五「御城編之八」)に見ることができる。

『金城温古録』には、見開き 2 枚にわたって多くの円形の銃眼穴を持つ練塀が描かれている。見開き 1 枚目の絵図には、「十四 御練塀」の文字、2 枚目の見開きには長さおよそ「四十三間五尺」と書かれている。換算すると約 79m となり、現存する練塀の全

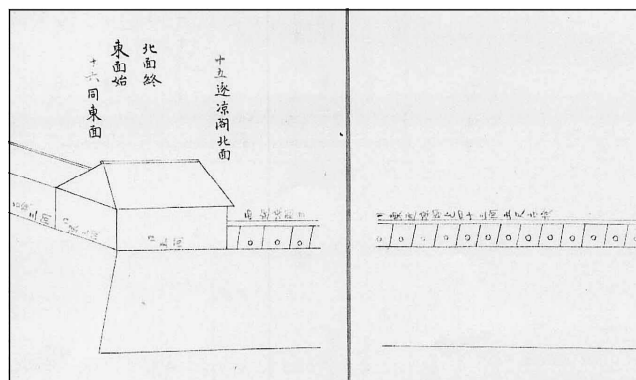


図7 練塀辺りを描いた絵図 (出典:『金城温古録』)

長約 80m とほぼ合致する。このことより練塀は、『金城温古録』の書かれた江戸後期から長さ方向に関しては変わっていないと推察される。

ただし形状は大きく変わっている。本瓦葺きの屋根が付いていたといわれるが、現在それは一切なく、上部の大半が大きく崩壊している。また 2015 年と 2019 年の研究センターの発掘調査によって、現在の地表面より 90cm ほど低い位置に地表面があったことが判明している。当時は、人が立って銃眼から鉄砲を撃つことができたことを物語っている。

この練塀はまた「南蛮たたき鉄砲狭間」とも呼ばれている。なぜ南蛮かは不明だが、練塀自体はたたきで造られているから、それを意識する形で「南蛮たたき」と呼ばれたのであろう。先に述べた北池にも護岸や池底などに多くのたたき遺構を残しているが、この練塀は崩れは大きいものの、北池のものに比べかなりの固さを有しているようである。



写真15 南蛮練塀鉄砲狭間、手前の柵は練塀の保護用 (2024.7.24筆者撮影)

造りの特徴としては、目視の範囲ではあるが、破面の状況や色から、明らかにたたきと判断できる。また触った感触からはかなりの固さも体感できる。通常のたたきと違うのは、小砂利がほぼ全面にわたって配合されていることである。

また造り方では、浸食によって内部が露わになった部分からは、版築による建造方法が窺える。版築とは、上から順に土を強く突き固める土木工法の一



写真16 版築による造りが推測される練堀
(2025.1.31筆者撮影)

つで、建物の基礎や土壁、土堀、あるいは城壁や土塁、堤防などに使われた工法である。中国大陸では万里の長城など古代から広く用いられており、南蛮の文字は案外この工法から来ているかもしれない。土ではなくたたきを用いたのは、さらに堅固なものとしたからにほかならない。

しかし現状は崩壊の危険もある。研究センターでは貴重な文化財として、亀裂の進行を止める方法など、現状保護のための調査が進められている。

5. 名古屋城内の「たたき」遺産

これまで研究センターの調査によって発掘されたたたき遺構は、34カ所に及んでいる。このうち8カ所は城の中枢部から離れた三之丸の武家屋敷跡や御屋形庭園からの出土である。中でも二之丸庭園に15カ所と多くが分布し（二之丸庭園以外の中枢部では11カ所）、さらに北池の1カ所にはこの数には入っていない多くのたたき（護岸、池底、擬石など）が集中して存在することが明らかとなっている。まさに名古屋城はたたきの宝庫といっても過言ではない。

その種別では、土間や整地面、排水溝、側溝、井戸、池底、暗渠、延段、建物基礎など多岐にわたっている。また施工時期については、練堀や二之丸庭

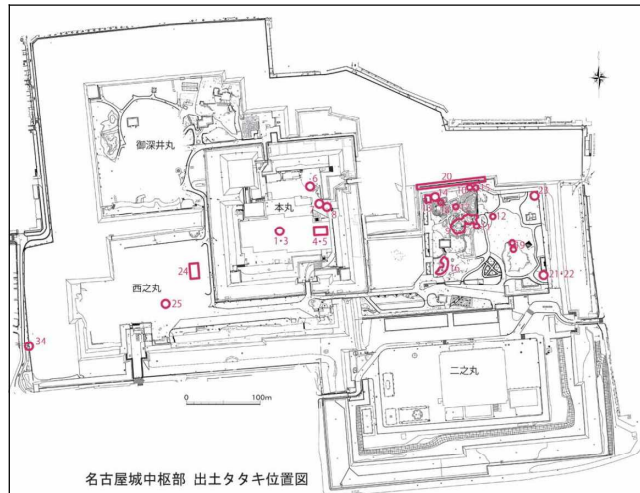


図8 名古屋城中枢部の出土たたき位置(赤マークの箇所、二之丸庭園に多く分布) (「名古屋城調査研究センター」提供)

園北池の一部、武家屋敷の井戸や土間など、近世と推測されるものが多数あるほか、近代にかかるものも辰之口水道のほか本丸御殿の土間や側溝、二之丸庭園北池の護岸や池底、擬岩、擬石、擬木など、こちらも多岐にわたっている。総じて、名古屋城では近世から近代にかけて、各所でたたきが多用されていたことが明らかになっている。

その多くは発掘調査後に埋設されたことから実見まではできないが、二之丸庭園の北池の護岸や池底、擬岩、擬石、擬木及び練堀は、見る事が可能なたたき遺産として存在している。

6. おわりに

日本古来といわれるたたき工法は、いまでは希少な左官工法の一つとなっている。かつては土間や井戸周りなどに広く使われた工法であるが、コンクリート工法全盛の時代になると、人造石工法と同じように、何時しか隅に追いやられ、忘れられた存在になることが多かった。しかし、今回の調査から名古屋城ではいかにたたきが重宝されて施工されていたの実態を見ることとなった。服部長七の人造石工法による遺産とともに、その役割を再認識する機会もなった。たたきの科学的調査や年代考証などの残された課題は、今後の調査によって解明されることを期待するところである。

なお、本稿で述べたたたきの評価は今後の発掘調査によって変わる可能性があることを付言しておく。

最後になったが、本調査では名古屋城調査研究センター学芸員の高橋圭也氏及び元同センター学芸員の岡千明氏に多くのご教示、ご協力を頂いた。同センターの皆様方にも誠意あるご対応を頂いた。心より御礼を申し上げます。

【文献】

- (1)名古屋城調査研究センター編『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次～第6次』名古屋城調査研究センター、2020年3月。
- (2)同上『第7次～第8次』2024年3月。
- (3)高橋圭也「名勝名古屋城二之丸庭園における擬岩・擬石の年代・分類・構造の整理」『名古屋城調査研究センター 研究紀要 第6号』名古屋城調査研究センター、2025年3月。
- (4)奥村得義『金城温古録』名古屋市図書館デジタルアーカイブ「名古屋コレクション」。https://e-librar-y2.gprime.jp/lib_city_nagoya/da/detail?tilcod=0000000005-00001523

第33回総会・ 第182回定例研究会の概要

夏目 勝之 / NATSUME, Masayuki

■第33回総会

日時：2025年05月25日（日）13:00～13:30

会場：名古屋市緑生涯学習センター

参加：21名

議長：浅野伸一 記録：夏目勝之

第1号議案 2024年度事業報告（案）（夏目事務局長）

第2号議案 2024年度決算報告（案）（加藤会計幹事）
監査報告（成田監査）

第3号議案 事業計画（案）（夏目事務局長）

第4号議案 2025年度予算（案）（加藤会計幹事）

第5号議案 2025年度パネル展担当幹事の変更について（案）（夏目事務局長）

以上について、提案された議案は、一括で承認された。

（※総会議案は、『産業遺産研究』誌と併せて郵送します。）

■第188回定例研究会

日時：2025年05月25日（日）13:30～17:00

会場：名古屋市緑生涯学習センター

参加：21名（他に見学の非会員2名）

司会：夏目勝之 記録：夏目勝之

記念講演

「私の産業遺産研究40年を振り返ってーガラ紡機、人造石遺産との出会いを中心にー」 / 天野武弘

40年を超える私の産業遺産調査では、多くの人との出会い、モノ（産業遺産）との出会いがあった。産業遺産に関心を持ったのは、1970年代後半の当研究会の前身である愛知産遺研時代に遡るが、以後今日まで多くの産業



講演される天野武弘氏

遺産の調査研究に関わってきた。その中で当日は、時間も限られているので、コンクリート工法発展の過渡期に土木工事で活躍した人造石工法に関わる遺

産、そしてわが国独創となる、また三河で産業として大きく発展したガラ紡産業の中心的存在であったガラ紡機の調査の経緯とその調査の実状、またそこで出会った人々との関わりや教訓などを、スライド写真を交えて語る事ができた。（天野）

1. 研究報告、調査報告

[188-11-01] 産業遺産物語り 5 「日本初の電子式計算機 FUJIC」 / 渡辺治男

日本初の電子計算機は富士写真フイルム(株)のレンズ設計技術者岡崎文次がレンズ設計の効率化の目的で開発した。世界初の電子計算機の米国ENIACに10年遅れて1956(昭和31)年に完成した。演算素子に1700本の真空管を使用し、レンズ設計の工数は1/2000になった。日本初だが専門家の評価は低かった。しかし、電機メーカーの電子計算機開発を触発し、世界レベルの計算機を生むきっかけとなった。（渡辺）



国立科学博物館に展示の電子計算機 FUJIC

2. その他諸報告、保存問題など

[188-22-01] トピックス（産業遺産に関する話題・近況など）

・旧今井貯木場（百々貯木場）の国重文指定の答申について / 天野武弘

国重文指定答申の紹介。豊田市の文化財指定は国指定の告示をもって解除される。

3. 研究誌、会報（研究会ニュースレター）

[188-31-01] 研究誌『産業遺産研究第32号』の編集について / 石田正治

編集管理表を元に編集状況を説明した。

[188-31-02] 会報ニュースレター 電子メール版について / 橋本英樹

4. シンポジウム・パネル展・その他事業

[188-41-01] シンポジウム「日本の技術史をみる眼」 / 八田健一郎

本日午前に実行委員会を開催。第41回の振り返りと第42回の主題を検討した。

7月を目標に次回第42回のテーマ決定を目指す。豊田市の人造石工法による旧今井貯木場施設が国の重要文化財になる機をとらえて、これに関わるテーマで豊田市博物館を会場に開催する案も出ている。さらに会員各位のお考えご提案も歓迎する。

[188-41-02] パネル展と講演会／渡辺治男

テーマ「大正ロマン、昭和レトロのものがたりⅢ」

開催期間：2026年2月3日(火)～2月23日(月)の予定

開催場所：名古屋都市センター、まちづくり広場
5月18日(日)に実行委員会を開催。第2回実行委員会は6月7日(土)、第3回実行委員会は7月20日(日)に名古屋都市センター会議室で開催する。

[188-41-03] 当会発行書籍等の電子化／石田正治

中部産業遺産研究会デジタ・アーカイブ(試案)を元に進捗状況を説明した。

[188-41-06] WEBサイトの運営と管理／岩井章真

研究会のWEBサイト <https://csih.sakura.ne.jp/>
※随時更新

5. 見学会、その他の催し物 案内

[188-51-01] 9月実施予定の見学会「西三河足助方面の産業遺産を歩く」(9月27日)／浅野伸一

見学会案内を元に説明。

[188-51-02] 近現代史研究会20周年記念大会「歴史遺産の発見・保存・活用」(7月13日)／浅野伸一

天野武弘氏報告。(参加無料)

行事概要を元に説明。

[188-51-03] 鳳山無線電信所国際交流ワークショップと台湾旅行について／石田正治

行事概要と鳳山無線電信所紹介資料を元に説明。

6. 文献紹介、資料紹介 ()内は紹介者

[188-61-03] 「KINIAS ニューズレター」近畿産業考古学会

[188-61-04] 「ニューズレター」東京産業遺産学会

[188-61-05] 「九州産業考古学会報」九州産業考古学会

7. その他の出版広報事業

なし

8. 役員会等

[188-81-01] 幹事会・役員会等／事務局

・必要の都度メールで実施

定例会・見学、シンポジウム、パネル展と講演会、など

・5/10(土) 13:00～ 緑生涯学習センター第3集会室で役員会開催

9. 事務局関係

[188-91-01] 会員異動(前回の定例研究会以降)／事務局

入会(敬称略): 吉原裕子、大海次明、堀部徹哉(以上4月1日付)、吉村聡史(5月12日付)

退会(敬称略): 井藤雅江、藤井建、古橋直樹(3月31日付)

[188-91-02] 2025年度会費納入のお願い／事務局

年会費: 4000円

【郵便局のゆうちょ銀行ATMから振込の場合】

口座記号・口座番号 00810-9-138886

口座名義 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキュウカイ

(郵便局のATMの近くに置いてある青色の振替用紙をご利用下さい)

【ゆうちょ銀行以外から振り込む場合】

ゆうちょ銀行 ○八九店 当座 138886

口座名義 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキュウカイ

問合窓口: 会計担当 加藤真司

ssmkatou@hm9.aitai.ne.jp

[188-91-04] その他

なし

[188-91-05] 研究会スケジュール、関連団体スケジュール、他／事務局

2025年

07/27(日) 第189回定例研究会 名古屋市市民活動推進センター集会室

09/27(土) 見学会

11/**(日) 第190回定例研究会(日時、会場未定)

第189回定例研究会 案 内

期 日：2025年7月27日（日）13：00～17：00

会 場：名古屋市市民活動推進センター

アクセス：地下鉄名城線・矢場町駅下車、徒歩5分

※定例研究会での報告を希望される方は下記事務局
担当宛ご連絡ください。

夏目勝之 <ec79helvetia@na.commufa.jp>

山田 貢 <yamada202102@gmail.com>

第190回定例研究会・見学会 案 内

見学テーマ：西三河足助地区の産業遺産を歩く

期 日：2025年9月27日（土）9：30～17：30

集合場所：豊田市内、豊田新線梅坪駅西改札口前

参加費：7000円（昼食代含む）

見学スケジュール案

9:30 名鉄、梅坪駅西改札口前集合

10:00 愛知製鋼疎開地跡（豊田市旧西中金駅近く）→

12:00 香嵐溪、桧茶屋

12:45 足助、寿々屋

15:00 日東醸造足助仕込蔵（大多賀町）

16:40 今井貯木場跡（百々貯木場）

17:50 名鉄、豊田市駅解散

担当：山田富久、天野博之、赤崎真紀子、天野武弘、
浅野伸一

※別紙、見学会参加申込書で

■会報98号の訂正

12ページと14ページの定例研究会の開催日、場所
などに誤りがありましたので訂正し、改訂版を発行
しました。

2025年度年会費ご入金のお願

1. 年 会 費 4,000円

2. 振替、振込口座 ゆうちょ銀行

■ゆうちょ銀行より振替

□座番号 00810-9-138886

□座名 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキョウカイ

■他銀行からの振込

ゆうちょ銀行 ○八九店

当座預金 138886

□座名 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキョウカイ

※ 2024 年度会費、未納の方は、合わせてお振り
込み下さい。

■編集後記、原稿募集

■編集後記

7月の定例研究会で『産業遺産研究』第32号を配付しま
す。多くの会員の参加をお願いします。

山田富久会員による調査報告は、緻密な現地実測調査を
まとめた力作です。

天野武弘会員の人造石の産業遺産めぐりシリーズは、第
23回となりました。

次回より新企画で「産業の記念碑めぐり」シリーズを開
始します。多くの会員の投稿をお願いします。（石田）

■産業遺産に関する諸情報、短信、文献紹介、ご意見など
お気軽にご投稿下さい。投稿は郵送または電子メールでお
送り下さい。写真には必ず撮影者と撮影日時を記載したメ
モを貼り付けて下さい。

原稿送付先：石田正治 ishida96@tcp-ip.or.jp

第98号の原稿締切日：2025/09/15

■「中部産業遺産研究会会報」発行予定

第100号（2025/10/15） 第101号（2026/01/15）

第102号（2026/04/15） 第103号（2026/07/15）



中部産遺研会報 第99号

ISSN 2189-5619

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage Vol.99

発行日：2025年07月18日

編集委員：石田正治・橋本英樹・山田貢・大橋公雄・浅野伸一・朝井佐智子・夏目勝之
中部産業遺産研究会事務局：

〒463-0088 名古屋市守山区鳥神町194 山田 貢 方

中部産業遺産研究会のホームページ <https://csih.sakura.ne.jp/>

掲載記事の無断転載を禁じます。

Copyright 2024, The Chubu Society For The Industrial Heritage, All rights reserved.